



TITLE:

現代日本社会の多文化接触領域におけるエスニシティ生成過程の研究--横浜市鶴見区にみられる沖縄移民の文化実践を事例にして--(Digest\_要約)

AUTHOR(S):

安井, 大輔

---

CITATION:

安井, 大輔. 現代日本社会の多文化接触領域におけるエスニシティ生成過程の研究--横浜市鶴見区にみられる沖縄移民の文化実践を事例にして--. 京都大学, 2014, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2014-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18634>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

## 現代日本社会の多文化接触領域におけるエスニシティ生成過程の研究 ——横浜市鶴見区にみられる沖縄移民の文化実践を事例にして——

安井大輔

本研究の対象は、日本および世界各地に展開された沖縄移民のなかでも、特に沖縄から日本本土へ渡った本土沖縄移民と、沖縄から南米各地に移住した経験を経てのちに本人または子孫が日本に帰還した南米帰還移民、そして彼らと関係をもつ非沖縄系の出自を持つ「日本人」となる。本研究は、彼ら集団をエスニック・マイノリティとしてとらえ彼らのエスニックな文化実践に焦点を当て、集団内外の多様化によって変容するとともに自分たちらしさを保持しようとする、エスニシティをめぐるベクトルの交錯を検討する。

本研究は序章・第1章～第6章・終章の全8章からなる。以下に各章の要旨を述べる。

序章では、本研究の問題と分析枠組が設定される。1990年代以降、世界各地の沖縄移民コミュニティが活性化され、2000年代から故郷沖縄の伝統文化と移住地における文化とが混じり合った文化現象が数多く報告されるようになった。沖縄文化として表出されるエイサー（沖縄の民俗舞踊）や言語、音楽、料理といった文化はかつて差別のための指標となった文化要素だった一方で、現在は多くの人に好まれる消費文化となっている。こうした沖縄文化が積極的に称揚されるようになった背景には、各地の沖縄移民に共通する状況の変化がある。それは、集団の全体社会における位置づけの変化（集団間の変化）と、集団成員の世代交代と格差拡大による変化（集団内の変化）である。集団の外部と内部において多様化する沖縄移民たちが、いかにして外部との相対で差異化された「文化」としての沖縄文化・沖縄らしさ（オキナワネス）を変容させるとともに自集団を担保させているのが本研究の問題となる。

そして沖縄移民たちの実践する文化現象は、異種混淆の結果としてだけでなく伝統的で「純粋な」文化としても生起している。文化は実体としては変化し続けているにもかかわらず、不変で一貫したものと強調されているのである。本研究は、このような文化の現れ方を開放性と恒常性というエスニシティのもつ双極的なベクトルの交錯としてとらえる分析枠組を設定し、沖縄移民のエスニシティ生成の過程を分析する。

第1章では、本研究の分析軸となるエスニシティの恒常性と開放性をめぐる理論的背景を提示して、そこから二つの分析課題を設定する。現代世界の多文化化は主に二つの理論によって論じられてきた。その一つ文化本質主義の立場とは、文化的差異をエスニック集団に固有・不変の集合的存在としてとらえ、全体社会を構成する要素として積極的に認められること（差異の承認）を要求する立場を示す。この異なった文化の共存を目指す多文化主義の立場は、エスニック・マイノリティの権利を擁護するものの、集団の文化的差異を固定化させ、集団から逸脱する存在や実践を捨象してしまう限界を抱えている。もう一つの文化脱本質主義の立場では、文化的差異を、不安定で絶えず混ざり合い変容する存在

としてとらえ、文化の混淆、混血性、雑種性（ハイブリディティ）を積極的に評価する。この立場は、多文化化する社会において、差異の創造や創意を可能にするものの、差異の持続性を等閑視してしまい、現実社会にみられる差異のもたらす抑圧や不平等の暴力から乖離してしまう傾向がある。つまり、文化本質主義の立場ではエスニシティの越境性を、脱本質主義の立場ではエスニシティのリアリティをとらえられない。エスニックな文化現象において、前者は、集合的アイデンティティの核となる領域に関わる、エスニシティの恒常性に、後者は、混交し変化が生じる文化の周縁領域に関わる、エスニシティの開放性を指す。現代のエスニック集団は、多文化主義が主眼とする集団間の差異の承認を進める多文化・化と、脱本質主義が主眼とする集団内部の多様化を進める多・文化化を求められているが、両者はいかにして接合されるのか。この文化理論的な問いを具体的実践から検討することが、本研究の第一の課題である。第二の課題は日本社会におけるエスニック集団の地位向上と自文化の継承である。日本のエスニック・マイノリティは、日本人が圧倒的なマジョリティを占める日本社会にどこまで同化するかという問題に直面している。エスニック集団のメンバーにとっての自文化は、アイデンティティの源泉として、また排除と差別への抵抗を組織する手段として重要な役割を演じている。しかし自文化を維持することはマジョリティの文化を身につけないことでもある。彼らは社会的・経済的な地位向上をはかるため日本社会への同化とエスニック文化の継承を両立する必要がある。マジョリティによって受容される開放性と自分たちらしさを示す文化的恒常性の両立はいかにして可能なのか。このエスニック集団が直面する状況を問うことが本研究の第二の課題である。

第2章では、本研究の具体的な調査地である横浜市鶴見区における沖縄移民コミュニティが形成される過程を示す。この地域は、京浜工業地帯の中核として大量の低賃金労働者を必要とし、大日本帝国の周縁各地域からの出稼ぎ民を吸収する多文化接触領域だった。戦前に職を求めて沖縄から鶴見に移動した大量の移民たちは差別と偏見のなかで、同郷者による職業と住居の斡旋ネットワークをもとに、集住地域を形成していった。彼らのほとんどが第二次産業の下請け工場で働く肉体労働者であり、彼らの生活・労働世界は、地縁や血縁に基づくものであり、彼ら集団は同質性の高いコミュニティとして形成された。彼らの言葉や音楽は、戦前は矯正されるべき遅れた習俗として抑圧されてきたが、終戦後に「解放」され、高度経済成長期には誇るべき文化として表出されていく。こうした時代状況の変化を受けながら、本土沖縄移民たちは、対象地域に外部社会から相対的に自立した独自の集住地を形成してきた。本章では、横浜市鶴見区という場に、エスニシティの恒常性を担保する本源的な沖縄移民のコミュニティが形成されていく過程を確認した。

第3章では、工場で働く低賃金肉体労働者の生活世界を中心としたこの沖縄コミュニティが多様化していく過程を示す。鶴見区の沖縄移民集住地には、戦後も沖縄からの本土就職者、沖縄から南米へ移住したのちにデカセギにより来日した南米帰還移民、日本人配偶者の移住や、世代交代にともなう職業や階層の分化によりメンバーが多様化することとな

った。鶴見区のおキナワネスは、それまでにあった地縁・血縁の原理だけでなく、沖縄語（ウチナーグチ）やかつての習慣など他の要素をも含むように定義が複数化されることで集団の外延を柔軟なものにし開放性を高めていった。ただし新しいメンバーの属性によっては彼・彼女たちはあくまでも周縁的なメンバーとして扱われており、おキナワネスの拡張は内部の多様なメンバーを序列化し、「沖縄」を語る正統性の競合も生じていた。本章では、鶴見区における沖縄コミュニティは、多様性に開かれている点において開放性をもちながら、集団内の多様性というまさにその性質が前提するものによって、集団内部での差異の恒常性を保っているという状況が確認された。

第4章では、エスニック組織としての鶴見沖縄県人会を対象に、県人会を構成する人びとの属性と「沖縄」集団に参加するためのメンバーシップ要件を整理する。戦前に村落単位の同郷者の相互扶助組織である郷友会の連合として結成された県人会は、戦後の沖縄移民の生活環境の変化によって、相互扶助を続けつつも「沖縄文化」の表出と親睦のための組織へと変わっていった。世代交代や階層分化によるメンバーの均一性低下のなかで、沖縄移民としての共同性を高める手段が求められた結果、県人会は郷友会単位では不可能な大型イベントである角力大会や運動会を実施する団体となったのである。その過程で、県人会は、沖縄移民のための相互扶助組織という伝統的な共同体原理の維持と、南米帰還移民や沖縄の出自をもたない日本人といった多様な他者の組み込みを両立させる必要が生まれた。そのため、現在の県人会は、下部組織である郷友会レベルでは非沖縄移民の加入を可能として組織の成員を拡張しながらも、上部組織である県人会レベルでは沖縄出身者に限定する二重構造をとっている。郷友会は、沖縄出身ではないが現会員と親密な関係をもつ学校の同級生や職場の同僚、知人友人にも入会資格があり、郷友会の名簿には南米帰還移民も含まれている。一方で県人会の名簿では、こうした周縁的な会員は含まれていない。不安定な就労に就くことも多いニューカマーである南米帰還移民は、会員間の相互扶助を目的とした郷友会の会員となり、模合（頼母子講：金銭の融通を目的とする相互扶助）に参加することで生活の安定をはかることができる。つまり、鶴見沖縄県人会は移民が現在暮らす「鶴見」という具体的な対面的関係としての同郷性と、彼らの故郷である「沖縄」という抽象的な同郷性を使い分けることで、日常生活の必要性から成員の拡張と想像の共同体としての結集を可能にしている。本章では、鶴見沖縄県人会を対象に、集団として多様性を含むことができるように外延を柔軟化させながらも外延の明確な共同体意識を保つ、エスニック組織の恒常性と開放性の接合を明らかにした。

第5章では、エスニック行事として鶴見区において開催されている角力（沖縄の格闘技）大会とエイサーを対象に、おキナワネスの競合および継承を観察する。鶴見の本土沖縄移民のあいだでのみ行われていた、相対的に閉鎖的な行事だった角力大会は、参加者の減少から1990年代から参加者を非沖縄系日本人・沖縄系南米移民・外国人まで拡大することで、行事の存続がはかられるようになった。また沖縄移民コミュニティでは実施されていなかったエイサーは、非沖縄出身者が多数を占めるサークル団体によって実施されるようにな

り、女性が太鼓を叩き子どもも参加できる形式とすることで、多数の演者を擁し地域を代表するような大規模な行事となった。ただし角力大会において外国人参加者が多数を占める現状から中止を求める意見や、エイサーは青年男子のみが行うものとする「本場の沖縄」のエイサー団体からの批判があるように、彼らの文化実践は真正性を問われている。そのために彼らの文化実践は「沖縄」の文化であるとともに「鶴見」の行事でもあると二重に定義をもつ。伝統文化の真正・非真正とは別次元の、生活世界に基づく真正性を併用することで、沖縄の「伝統」とつながりつつも出自にとらわれないメンバー確保を両立させる実践を可能としている。本章では、開放性を示す行事として機能する一方で、それまでと異なる新しい恒常性を作り上げていくエスニック行事の役割を明らかにした。

第 6 章では、エスニックフードとして鶴見区における沖縄移民たちの食事経験や彼らの経営する沖縄料理や南米料理のレストランを対象に、食におけるオキナワネスのイメージ戦略と消費文化化を考察する。本土沖縄移民にとって、ヒージャー（ヤギ）を飼いゴーヤやナーベラー（ヘチマ）を栽培し食べる行為は、故郷をしのび、自らのオキナワネスを保つ文化実践であり、故郷の料理を提供してくれる沖縄料理店は、故郷の言葉や歌舞音曲を共有することのできるコミュニティの結節点だった。この沖縄移民コミュニティ内部での「味」の需要を満たしていたエスニックレストランは、沖縄移民コミュニティ外部に「沖縄イメージ」を発信する必要から変容していった。それは、コミュニティ外部からのかつてと異なる顧客の嗜好に合わせて料理の味付けを変え、メニューを多言語で表記し、従業員の出身地域が多くの国・地域に分散する多様化の過程、すなわちエスニックフードにおけるオキナワネスの開放性を高めていく過程であった。この変容の過程で、従来沖縄移民コミュニティの構成員に限定されていたエスニックフードは、鶴見区の多文化共生事業や観光客誘致の文脈から、地域の多文化性を象徴する文化として紹介され、多くの「日本人」の客に消費される商品になった。コミュニティ外部に対してオキナワネスの開放性を象徴する文化となったのである。一方で、多様な客の嗜好に合わせていった結果、味付けや調理法は沖縄県で行われているような伝統的な製法からは逸脱したものとなっている。ただしその変容が全面的に押し出された料理は受け入れられず、「本場の味」を演出された料理を好む実態がみられた。つまり、エスニックフードは客の嗜好に合わせて味を変化させていくことと同時に、イメージとしての「伝統」を自己言及的に新しく作り出してもいるのだ。沖縄コミュニティのエスニックフードは外部への開放過程において、恒常性が再帰的に構成されている。本章では、多様なアクターに受容されるようハイブリッドでありつつ真正性の基準として恒常性が求められる多文化接触領域のエスニック食の役割を明らかにした。

終章では、第 1 章から第 6 章までの内容を、集団内外の多様化にともなうエスニック集団の変化、エスニック文化の継承という課題に即してとらえなおす。本研究の事例では、南米帰還移民の流入（多文化接触）や世代交代（集団内部の多様化）などによってオキナワネスが拡張され、地縁・血縁に加えて「沖縄」的慣習や古い言語の保持など「沖縄」を

担保する要素は拡大していった。「沖縄」の外延が広げられた結果、エスニック集団と他のエスニック集団および外部社会を分かち境界は流動化し開放的になった。一方で、かつての集団に自然に備わっていた均質性にともなう凝集力の低下に対し、沖縄の歴史や文化に何らかのつながりを示すことで沖縄らしさを証明する集団の求心点としての「恒常性」が再帰的に構成された。この現象は非「沖縄」集団となり得るエスニック集団を「沖縄」として取り込み、同時に日本社会に受容されつつ「沖縄」集団としての差異を維持するための方法であった。つまり鶴見の沖縄コミュニティは、オキナワネスを担保する対象を拡大的に再解釈することで、文化的境界を維持しながらも、多様なメンバーをエスニック集団に組み込み、集団内外の多様化を一つの集団のもとに接合させてきたのだ。これは同時に、恒常的ではあるが日本社会において消費可能な「沖縄」イメージを産出していくことでもあった。自分たちの文化を商品としての消費文化に変えていく過程でもあった。こうした文化のブンカ化は、集団がマジョリティの文化に同化することなく自分たちの文化を継続していくためのエスニック集団の戦略であり、外部社会の変化に対応した消極的選択であった。その結果、自分たちのイメージが改善され集団としての地位が向上と文化の継承が可能となったのだ。

文化の多元性・多様性が保証され、文化の開放がより促進されるための装置として、恒常性が求められる。同時に、安定した集団アイデンティティが保証され、恒常性がより促進されるための装置として、開放性・多元性・多様性が求められる。本研究では、このように多文化化が進展することで、個々の文化集団の恒常性を具現する装置として、エスニシティが編成され再強化されるという、エスニシティの開放性と恒常性の相乗的な関係が確認された。